

渡嘉敷村船越原におけるオオツタノハの産出層準について

山崎 真治

A description of the strata bearing limpet shells (*Scutellastra optima*) at
Funakoshiharu, Tokashiki village, Okinawa pref.

Shinji YAMASAKI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第11号別刷

2018年3月30日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.11
March, 2018

渡嘉敷村船越原におけるオオツタノハの産出層準について

山崎 真治¹⁾

A description of the strata bearing limpet shells (*Scutellastra optima*) at Funakoshiharu, Tokashiki village, Okinawa pref.

Shinji YAMASAKI

1 はじめに

黒住耐二氏、國木田大氏と筆者は、先に渡嘉敷村船越原(図1)から採集されたオオツタノハ遺体の産状と年代について報告した(山崎ほか2016)。黒住氏は2012年以前に船越原遺跡3地点(図2左参照)でのオオツタノハの分布を確認しており、筆者は2012年7月に2地点の海側に分布する離水ビーチロック(図2右図のA、図3、4参照)周辺でオオツタノハを採集し、放射性炭素年代測定を実施した結果、 4610 ± 40 14C BP (MTC-17178)、 4575 ± 40 14CBP (MTC-17179) という年代値を得た。ビーチロック中の貝殻、サンゴの放射性炭素年代は 4360 ± 20 (IAAA-123933: タカラガイの仲間)、 4680 ± 30 (IAAA-123934: ヤコウガイ?)、 5570 ± 30 (IAAA-123930: サンゴ) というもので(パリノ・サーヴェイ株式会社2016)、オオツタノハの年代とも調和的であった。しかし、この時点ではオオツタノハの厳密な産出層準を明らかにすることはできなかった。

脱稿後、筆者は2016年3月20日に船越原を再訪する機会を得た。その際に、2地点海側のビーチロック周辺でオオツタノハの産状を観察可能な良好な露頭を確認したので、以下ではその状況について報告する。

2 露頭の状況

2016年3月20日に筆者が確認した露頭は、船越原遺跡2地点海側のビーチロック部分(図2右図A)で、2012年7月の筆者らの調査以後に波浪によって侵食され、露出したと考えられる。ビーチロックの

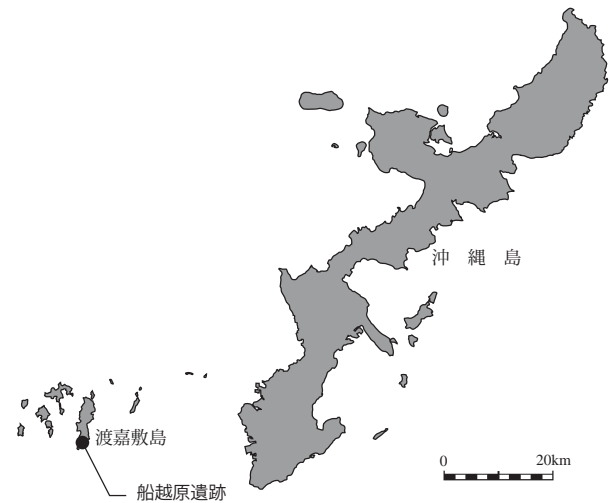


図1 船越原遺跡の位置

標高は約6mで、現海面からは離水している。

観察できた露頭の高さは20cmほどで、上位15cmほどが粗砂や礫からなるビーチロック層、その下位は褐色砂層となる(図5、6)。ビーチロック層の基質は粗い砂で、大小のサンゴ塊や砂岩礫、貝殻を多く含む。ビーチロックの下位に位置するしまりの強い褐色砂層中には貝殻や遺物は見られない。オオツタノハを含む貝殻は、ビーチロック層の下位に集中しており、5点ほどのオオツタノハとともに、ニシキウズ科、タカラガイ科の巻貝が確認できた。これらは人為的廃棄のまとまりを示しているのかも知れない。貝殻以外に土器等の遺物は認められない。

以上のことから、従来不明確であったオオツタノハの産出層準はビーチロック層中であること、その

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 japan

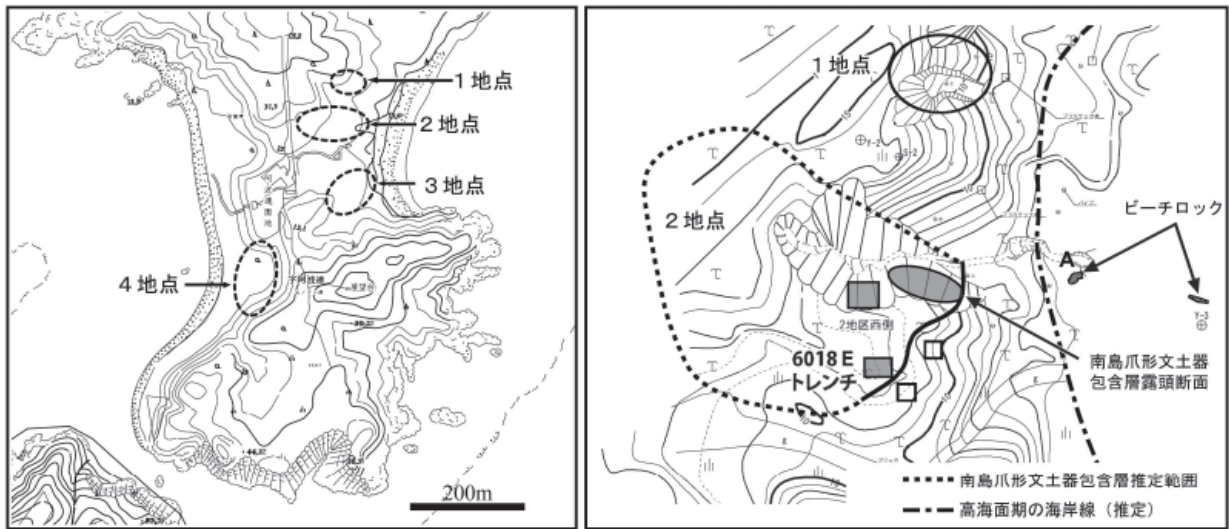


図2 船越原遺跡周辺地形図（左）と2地点海側のビーチロックの位置（右）
 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016より転載。

中でも下位であることが明らかとなった。ビーチロックは標高約6mの地点に分布しており現海面からは離水していることから、縄文海進の高潮位期の所産と考えられる。このことは、オオツタノハの放射性炭素年代測定の結果とも調和的である。

3 まとめ

本稿では、従来未確定であった渡嘉敷村船越原におけるオオツタノハの産出層準について、2016年3月20日に確認した新たな露頭の観察結果にもとづいて、離水ビーチロック層中であること、その中でも下位であることを確認した。このことは、オオツタノハの放射性炭素年代測定の結果とも調和的である。

参考文献

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『慶良間諸島の遺跡－平成22～27年度県内遺跡詳細分布調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第81集
- 忍澤成視 2014「日本列島先史時代における東西『貝の道』の比較研究・その2」『高梨学

術奨励基金年報 平成25年度研究成果概要報告』公益財団法人高梨学術奨励基金：223-230頁

- 黒住耐二・樋泉岳二・赤嶺信哉・盛口満 2012「沖縄諸島の先史遺跡で初めて確認されたオオツタノハの生息（第15回動物考古学会研究集会開催報告）」『動物考古学』第29号：91頁

- パリノ・サーヴェイ株式会社 2016「船越原遺跡の自然科学分析」『慶良間諸島の遺跡－平成22～27年度県内遺跡詳細分布調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第81集 沖縄県立埋蔵文化財センター

- 山崎真治・黒住耐二・國木田大 2016「渡嘉敷村船越原採集のオオツタノハ遺体の産状と年代について」『慶良間諸島の遺跡－平成22～27年度県内遺跡詳細分布調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第81集 沖縄県立埋蔵文化財センター



図3 船越原遺跡2地点の遠景（海側より見る） 2016年3月20日撮影
写真中央のアダンの茂みの奥にビーチロックがある。



図4 ビーチロックの近景 2012年7月29日撮影



図5 ビーチロック層中のオオツタノハの産状（1） 2016年3月20日撮影



図6 ビーチロック層中のオオツタノハの産状（2） 2016年3月20日撮影
写真中央に見えるのがオオツタノハ。周囲にはニシキウズ科やタカラガイ科の巻貝が見える。オオツタノハは上位のビーチロック層中に含まれており、下位の褐色砂層には貝類は含まれていない。